

子ども達の豊かな成長・発達の力を合わせるようにしましょう！

教え子を再び戦場に送るな！ 2015年10月28日発行NO. 558

国も大阪府も そして豊中市も 教育予算の大幅増を！

豊中市

⇒「きらきら署名」

国・大阪府

⇒教育署名

国の責任で
35人学級の前進を

自治体ごとで広がる格差

- 小・中とも全学年35人以下学級
- 小1、2年の他に一部の学年で35人以下学級
- 小1、2年のみ35人学級(国基準)
- 少人数学級の実施状況



安倍首相は「35人学級の実現に向けて鋭意努力していきたい」(15年2月23日)と衆議院予算委員会で答弁しました。しかし、来年度の政府予算の概算要求には、35人学級のための予算化はされていません。定数の改善は2020年度以降に先送りしています。国が35人学級を先送りする中、今、自治体ごとに独自に少人数学級をすすめています。しかし、大阪府は他府県のような

手厚い手立てをとろうと
していません。

豊中では、クラスの人数が年度途中に40人を超えたにもかかわらず、クラス増にするための講師がいらないという状態で、40人を超える状態の学校が複数うまれています。



豊中市議会へ
「きらきら署名」

子どもたちの瞳がきらきらが輝く保育・教育の充実を！と、全教豊中教組や豊中市内の保育・教育関係団体が毎年取り組んでいます。

今年には次の3つの請願項目でとりくんでいます。
①認可保育所を新增設して希望者全員が入所できるようにし、待機児童を完全に解消すること。
②小・中学校の全学年で市独自に35人学級制を実施することを展望し、段階的に実施学年を増やす

こと。
③子どもの医療費助成を、通院・入院とも中学校卒業まで拡充することを展望し、段階的に実施年齢をひきあげること。

国・大阪府へ
「教育署名」

【主な請願項目】

- 少人数学級をただちに実施すること。
- 正規教職員を増やすこと

○教育費の保護者負担軽減をすること。

もう、劣悪な教育条件の改善はまったなしです。私たち教職員の声、そして父母・国民の声を大きく届けましょう。



戦後70年

平和・戦争について考える 四五〇名の市民・子どもが見学



9月12日、13日に中央公民館で開催しました。

ここ10年ほどは参加者が三〇〇人前後でしたが、戦争法案が審議されていくという情勢を反映してか、四五〇人を超える参加者がありました。

戦争体験者の故アレン・ネルソンさんの講演を中心としたビデオを監修した平塚さんのお話や、生徒を勤労奉仕で引率し豊中空襲で亡くなった旧制豊中中学（現豊中高校）の宮川先生の娘さんのお話など、6人のお話ほど

展示では、沖縄の歴史と現在の基地の様子をオ

スプレイの模型とともに解説したもの、9条が守ってきたもの、今年のNPT核再検討会議ニューヨーク行動の様子、戦争法案についての各新聞社の報道の違いなどを実行委員会で作成しました。

また、野畑小、豊島北小、東泉丘小の子どもたちの平和学習の壁新聞や図画が好評で、「力作だ。」とフェイスブックに書いてくださった市議さんもありました。

学校での平和教育の大切さを痛感しました。
(文責 西山)



あの戦争はなんだったのか！ 歴史の事実を身ぐる、真実をまき、語り継ごう！ 歴史歪曲の安倍自民党政権 侵略戦争美化

日中戦争 「三光作戦」 中国戦線の日本軍

「満州」を除く中国大陸には70万人前後の日本軍がいました。「現地調達」「現地自活」の方針を取り、占領地で農村に部隊を派遣して武力で脅しながら米穀を奪いました。

また、占領地域を警備するだけではなく、敵性ありと見なした部落を軍事作戦で壊滅させたりしました。殺戮すること、焼却破壊することがおこなわれ、中国側からは「三光作戦」と呼ばれました。軍隊内では上官の命令へ

の絶対服従を常に強制されていた。軍隊教育では「私的制裁」という名の肉体的・精神的暴力によって兵士を鍛えるという考え方が支配的でした。初年兵に中国人捕虜や民衆を銃剣で殺害させる「刺殺訓練」が日常化していました。

「戦場に慣れさせるには、殺人が速い方法。度胸試しである。これには俘虜を使用すればよい」「銃殺より刺殺が効果的」とある師団長が述べています。戦場では兵士の持つ人間的感情を削ぎ落すことが重視されました。

70年前に日本がおこなった戦争が侵略戦争であったというのは、世界の常識です。戦後の政治はナチスドイツやイタリア、そして、日本の軍国主義を否定して出発しています。しかし、今、安倍自公政権は、アジア諸国への侵略戦争を否定しようとしています。虐殺の人

数などの規模の議論はありますが、南京で大規模な日本軍による虐殺があったことは小泉政権時代の日中歴史研究でも明らかにされています。歴史の事実を目をつむり、国のあり方を大きく変えようとしています。私たちが、どう生きるのが問われています。